

特集：旧追分寮

追分寮管理日誌欄外

前中学部教頭 栗原正己

大屋根二題

その一

校友会（現生徒会）誌第4号（1960.3.17発行）の昭和34年度年間行事欄に次のような項がある。
8月10日（月）～14日（金） 中学部修養会（於軽井沢追分寮）
8月15日（土） 登校日 修養会参加者帰京（天候悪化の為）
台風により帰路の交通機関が不通になったことでプログラム無しの一泊となったためである。台風が中心が軽井沢を通過するのは、めずらしい事と言われる。二泊三日の2日目の午後から、時折風雨が強くなり、3日目昼食後帰京の、その昼食時に大屋根（ホール）の一部が、激しい音と共にはがれだした。その日の管理日誌には次のように記されている。（管理は水野 誠先生（聖書科、修養会担当）尚、私は、全員宿舎に移動した折、2階から写真を撮っていた（ようである）。

八月十四日 金曜 暴風雨後快晴

管理者 水野

嵐のため信越線不通、碓氷峠もバス通らず。八方連絡の後遂に一泊せざるを得なくなった。生徒は大喜び。帰路の高原バスを交渉。食料を油屋その他より購入。大屋根のトタン張りが強風で八坪ばかりはがれてとび、雨も甚大。風が東西だったので

宿舎は無事。但し教師室雨もり。連絡により院長先生及び豊州木材の技師、夜になって来寮さる。停電、電話不通。作業員臨時休み、台風で家がつぶれたため。

八月十五日 土曜 曇り時々晴れ

管理者 江良

中学部修養会一日延期（台風列車不通）の所高原バス2台にて6時帰京。職員、給食員共。院長横川まで見送る。（以下略）

〔補注〕

八月十二日 晴

中学部前期無事帰る。後期の生徒バスにて元気で来寮。生徒87名、先生12名。

八月十三日 暴風雨

台風第7号のため嵐となり、ピクニック、キャンプファイヤー等すべて変更。（中略）



南北共に遠く山が見えていた。

夕刻より台所・講師室に雨もり。(トタン屋根のため雨がひどいと話しが聞こえない。)

付記。(この年の夏期修養会)

中学部前期 8月10日～12日 生徒87名 先生11名

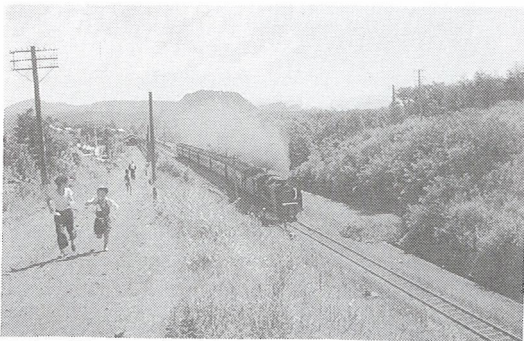
高等部 8月24日～27日 生徒84名 先生8名

[昭和34年度 追分寮管理日誌より]

昼食時が最も激しい時であった。その後、急速に明るくなり日が射してきた。風は西にかわり、まだ強かったが、一同ホットした。しかし、帰路の交通手段はなく、一泊せざるを得なくなる。専任初年の私には、その一泊をどのように過ごしたか、記憶が定かではない。ただ、長野院長先生が長靴姿で来寮された時、歓声があがったことだけ覚えている。

さて、後刻知ったことであるが、舞台裏を二つ記しておく。一つは、大変大きな問題となった百人余の一泊分の食料補給のことである。当時は、使用団体毎に会計を独立させていたので、引継ぎの際は、残留品は無しの状態にすることになっていた。従って、この日は昼食を以て何も無い状況になっていたのである。(当時の給食担当秋山(旧姓貫井)久子氏談より)

もう一つは、この年に新設された追分寮の、最も頑強かつユニークなホールの建物の大屋根の一部が、なぜはがれ飛んだかである。この地方では、



信越線は単線。SLの音は寮まで聞こえていた。信濃追分駅近くにて。

東風が吹く。風を東から受けて涼を採る一方で、屋根は東側を強く造ると聞いている。つまり屋根板は東側を上にするによって、わずかな透間にも風を入れないようにするのである。寮の大屋根は、逆だったようである。(応急修理は、18日迄に完了している。日誌より)

その二

「明治の青年、昭和の青年」このセリフが出たのは、大屋根の塗り替え計画の年であった。色見本を前に意見が見事に二つに分かれた。「青」を主張する3人と「黒茶」を唱える3人。当時の管理委員は、外崎長三郎先生、井上健之助先生、江良顕三郎先生(以上が自称明治の青年)南部先生、野田文一郎先生、そして私(栗原)である。(これが昭和の青年ということになった)どちらがどの色を主張したのか。実は、明治の青年組が終始「青」を強調。その論客に昭和組は敗退したのであった。塗りが完成した開寮時、青空に鮮やかな「青」屋根が輝いていた。後日登った石尊山頂上からも、その所在がわかった。「明治の青年」の若々しいお気持ち、管理委員会も長閑な時であった。

追記

[感謝]

小川 誠一郎 氏	油屋旅館先々代
小川 貢 氏	同上先代
佐藤 武治 氏	常駐管理
同 夫人	管理・給食
割田 氏	常駐管理
同 夫人	管理・給食
土屋 正夫 氏	常駐管理
同 君江 氏	管理・給食
児玉 元輝 氏	用務全般

〔記念〕

- ホールの円形テーブル及び椅子
麻布東鳥居坂本校（旧建物）キャフテリア所在
昭和8年(1933)創建当初からのもの。
- 講堂の長椅子
同上の小講堂所在。小学部講堂としても用いら
れたもの。（数却同型製作追加）
- 玄関入口上のローマ字表示

井上健之助先生の手作り。風倒木の白樺の枝を
利用した力作。

- 新入口の門柱の標札
外崎長三郎先生ご隠退後の筆及び小野寺昭夫先
生の彫刻によるもの。
- 運搬用手押車（室内用）
松本 鱗氏（元小学部用務）の手作り。室内の
大物や毛布・洗濯物等の大量物運搬に大変便利。

追分寮・表と裏のはなし — 番頭さんの思い出 —

私の手許に、1959年6月12日付で中・高の修養
会準備委員会の発行した「夏の修養会について」
という粗末なプリントがある。当時宗教主任だっ
た私が自分でガリ版を切った、修養会へのお誘い
とともに生徒の希望を尋ねる予備調査のアンケ
ートだが、すでに決まっている日時とともに、場所
についてこんなふうに予告されている。

〔場所〕 軽井沢追分に目下着々建築進行中の

東洋英和女学院「未だ名のない」寮

（建築雑誌に紹介された記事によると「信濃追分寮」）

寮のホールがノアの箱船をイメージしてユニ
ークな形に作られたのは、外崎長三郎先生のアイ
デアだったのかもしれないが、最初設計の段階では
調理場や風呂場は西側に、玄関は東向きに、宿舎
はしたがって表玄関からは見えないように配置さ
れていた。夏の追分は東風がいいので、ホールに
も玄関にも十分風を取り込むように、また火を使
うボイラーや台所は風下に、というのが設計者の
配慮だった。門からの通路も含めて、これをそっ
くり東西裏返しにしたのは、調理を担当する南波
しげ先生の強力な主張だった。西日のカンカン当

元中高部宗教主任 水野 誠

たる調理場などとんでもない。多くの宿泊者の命
をあずかる食事の衛生を考えても、また毎日朝は
みんなの起きる前から働き始め、午後一番暑いと
きに夕食の支度をする調理要員の人達のことを考
えても、台所はどうしても涼しい東側でなければ
ならない。

キャンプと違って運動量の少ない修養会等のプ
ログラムでは特に、食事の質・美味しさ・楽しさ
は、生活全部を活性化するのだから、調理は大切
に考えなければいけない。南波先生が文字通り心
血をそそいで指導した寮の食事は、配膳のし方や
マナーも含めて、その後永年にわたって追分寮の
大事な伝統になった。（東風と東向きの風呂はそ



一日遅れて帰れることになった朝、壊れた大屋根を背景に記念撮影。天辺から裏側も大きく割が
れている。

の後思わぬハプニングを生んだが、後述する)

中・高の最初の修養会とき、玄関にはまだ何の表札もなかった。教頭の井上健之助先生が散歩のとき白樺の小枝を沢山拾ってきて、ローマ字で TOYOEIWA JOGAKUIN と打ち付けた文字と、ベニヤで作られた校章(但し文字は「追分寮」)が、ずっと寮の表看板になった。

写真はそのときの光景で、下で釘など持って手伝っているのは、聖書の浅見正子先生(現東北学院大学浅見定雄教授夫人)である。

寮は運営の経済的ニードもあって、英和内部の諸行事だけでなく、教会や学校等キリスト教団体に貸し出されたが、開寮中男子の職員の運営委員が交替で常駐することになり、愛称「番頭さん」と呼ばれた。

寮のフォーマルな表の記録は書ける人が他にもあると思うので、以下番頭さんしか知らない裏話を中心に、いくつか思い出を記しておきたい。

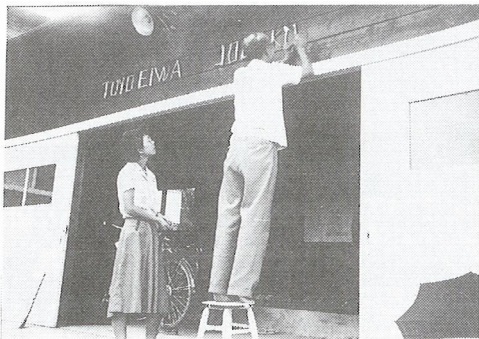
『今日帰れない!』

中学部の修養会の最後の日、台風による暴風雨に襲われた。さすがに頑丈な丸太組みの建物はびくともしななかったのだが、激しい東風にあおられて、出来たばかりの大屋根のトタンが、ばりばりばたばたと大変な音をたてて次々引き剥がされて飛んで行き、東の調理場にはボタボタ雨漏りが始まった。冬使う窓の雨戸を、ずぶ濡れになりなが

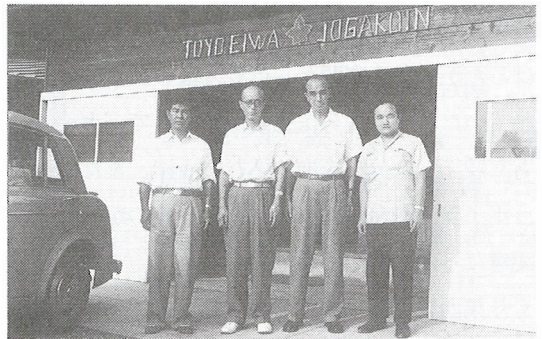
ら物置から運んで、とりあえずガス台や食料の上をカバーしたが、だんだん漏る範囲が広がる。

ちょうど昼食の最中だったが、そのうち合掌造りの大屋根の下の東向きの三角のガラス窓に、飛んで来た木の枝でも当たったのかピシッとひびの入る音がした。あれが外れて飛んだら誰か大怪我をするかもしれない。「雨漏りがひどくなるから」と、普段は食べ物を持ち込まない約束の宿舎に、みんな自分のお皿を運んで食べるように急がせた。宿舎の二階からホールの大屋根を見て、2メートル程もあるトタンが飛んで行く光景に、初めて嵐の激しさを知って泣き出す生徒もあった。あれが人に当たったらどうなるのだろうと心配した。

嵐はじきに収まったが、電気も電話も完全に不通。道路は縦横に風倒木にふさがれている。碓氷峠はトンネルも道路も崩れて、しばらく通れないことがわかった。(当時信越線は、峠はアプト式の旧線だけで、道路も碓氷バイパスはまだなかった) 予定通りに帰れないことがはっきりしたとき、生徒にパニックを起こさせないようにそれを伝えるのは、小松明子先生(現藤森夫人)が適役だった。ポーカーフェイスで目をぱちぱちさせながら「ちょっと皆さん困ったことができたのよ。」という調子で、汽車もバスも不通で今日帰れないことを告げると、何と生徒たちは歓声を上げて喜ぶではないか。「もう一晩泊まれる」と、先生を信



玄関に白樺の枝で文字を作る井上健之助先生



初期の「番頭さん」たち。右から、水野誠宗教主任(筆者)・江良頭三郎小学部教頭・井上健之助中高部教頭。

頼しきって少しも心配していないのだ。

それはいいとして、番頭さんには緊急の課題があった。帰路の算段は東京からの救援を待つにしても、取り敢えず学校に状況を連絡すること、100人分の食料の確保だ。最後の日に使い切るように上手に仕入れた米ももうない。

電話も電報も駄目ななかでも、鉄道はもしかすると別の通信手段をもつのではないか。私は自転車で信濃追分駅に向かった。

実際には自転車は荷物にしかならなかった。至る所道路をふさぐ風倒木の下をくぐったり、自転車をかついで上を乗り越えたり、水溜りぬかるみをわたって、駅についてみると、駅前の道路はプラットホームの半分諸共えぐり取られて谷に落ち込んでしまっている。壊れたすき間からホームに這い上がって、駅長事務室に相談すると、今し方駅前の郵便局で電報が打てるようになったという。

駆けこんでみると、小さな三等局ながら無線電話の設備があるのか、緊迫した形相のお客たちを前に、一人だけの若い女性の局員が、次々差し出される電文を懸命に電話送達している。長野院長宛に、今日帰れないこと、屋根が壊れたほか皆無事であることを打電し、ついでに自宅にも簡単に、心配せぬよう連絡したいと思った。私の電文を「キョウカエレナイ」まで読み上げて彼女は嘖き出した。後半は「セイトオオヨロコビワシャカナワン」だった。

その足で食料を求めてあちこち頭を下げて廻った。いつも親切に何でも運んでくれる寿美屋さんもお手上げ。油屋旅館も「うちにも60人からお客が泊まっていて、食事が出せなかったら旅館としては死活問題だから気の毒だけど米は譲れない」と言った。

100人の子どもたちを飢えさせるのか。夕方先

生方みんなと、捨てる寸前だった残パンをかき集めた。蠟燭の光で注意深く、かびてないか確かめたパンを、プロパンの火でこんがり焼いて、バタももうなかったから歯ブラシで醬油を塗って食べさせた。幸いなことに、夜になってから、さすがに気にかけて旅館が、自分たちのルートで手にいれた米を、どさりと一俵届けてくれた。小さく千切った梅干しや、漬物の残りを押し込んだだけの握り飯を、生徒たちは一言の不平もなく食べてくれた。ホールに散々伍々蠟燭を囲んで、先生方から思い出話しやクイズや怪談などを聞いた最後の夜が一番楽しかったと、あとから何人もの生徒が言っていた。

翌日嘘のような快晴の中で、大きく剝がれた屋根を背景に写真を撮った。復旧した碓氷峠を真っ先に上がってきたのが、補修の建材を積んで、助手席に長野院長の乗ったトラックだったと、栗原先生から聞いている。

私たちがどのようにして東京まで帰ったのか、私はどうもよく思い出せない。

ヌード・ショウと出歯亀

寮ができたてのころ、周りは鬱蒼たる樹林で、寮からは緑のほか何も見えなかったから、私たちは自分たちだけの世界を満喫して気楽に生活していた。ところがある日、実直なボイラーマンの児玉さんが、少々困った顔をしてやってくると、遠慮がちに「先生。生徒さんに、風呂にはいるとき窓を閉めるようにおっしゃってください。」という。「風呂場の東側は何もないようだけれど、垣根の外は村道だからたまには人が通るんです。」

慌てて東側に廻ってみると、心地よい東風を受けて、お風呂場の二つの窓は左右一杯に全開されて、何と見事なオールヌードの額縁ショウだ。

そこで外から声をかけたのでは、大恐慌をきた

すと思ったので、急いで西に廻って、女の先生に脱衣場から注意してもらった。

日曜大工が趣味の井上健之助先生は、早速材木屋から板材を手に入れて、翌日には手ぎわよく窓の下半分をカバーする目隠しがつけられていた。翌年には更にその外側に植え込みも作られて、村道から見られることはなくなったと思う。

お風呂のことはそういうわけで笑い話で終わってしまったが、数年後にちょっと笑えないことに出くわした。寮の宿泊棟は、後をお願いしてくつろげる和室を一つ建て増して貰ったほかは、全室揃って二段ベット8人部屋で、北側の真ん中に窓、その下に床の高さに掃き出し口がある。北側は地境まであまり広がらないが鉄条網の垣根があり、その外は深い樹林しか見えず、そちらから闖入者がありうるなどと考えたことはなかった。

ところがある日、何気なく寮の裏側を見回っていたら、一階のある部屋の掃きだし口にべったりと泥足の地下足袋らしい足跡を見つけた。明らかに、誰かそこに足をかけて上の窓から覗いた者があるのだ。私は、窓にへばりついてニタニタしながら中を覗いている「出歯亀」氏の様子を想像してぞっとした。どうしたものか。一階の全室の窓に目隠しをつけるべきだろうか。せっかくの緑が楽しめなくなる。むしろ、子どもたちも中学生にもなったら、どこに泊まっても寝室で着替えするときは、カーテンを引くくらいのたしなみは身につけさせたほうがよい。子どもたちにやたらに恐怖心を起こさせたり、悪くすると妙な噂や、こうした寮にありがちな怪談の種になったりして、迷っている生徒や心配している親たちに、修養会への参加を躊躇させることにもなりかねない。いろいろ考えて、足跡のことは井上先生以外今まで誰にも話さなかった。

ただ「この辺には、寮からは見えなくても、周りには別荘も沢山あるし、林の中を散歩するのが好きな人もあるから」という言い方で、北の窓を用心させた。また、「番頭さんは、夜中に寮の周りを巡回することになってます」と生徒に予告したうえで、消灯時刻ころにわざと目立つように、懐中電灯を振り回しながら、声高に明りのついたままカーテンの開いている部屋に注意を与えたりして歩いたこともある。実は近隣に学校は用心深いと印象付けて、出歯亀を牽制するためだった。

お父さんの写真を埋める

私は、子どもが一生懸命考えて何か言ったりしたりしたときは、たとい大人の眼には可笑しくても、決して笑ったり軽んじたりしないよう心がけている。だから、今は芸術家だったりジャーナリストや保育者や牧師の夫人だったり、立派な子どもたちを育てたお母さんだったりする人たちの、幼かった日の「誰にも言わない約束」のまま門外不出の可愛い思い出も少なくない。中には「先生持ってて」と預かったまま卒業まで取りに来ず、こちらから口に出すのも控えたため、退職後も自宅のデスクの引き出しに眠ったままの「お母さんに見つかるのと取り上げられてしまう」十字架のついたネックレスや「自殺するのはやめる決心をした」剃刀などあった。

卒業後何年かして出会ったその一人に「あれはどうしようか」と持ちかけたところ、「イヤーだ先生、そんなものまだ持っているんですか。捨ててください」と恥ずかしがられたので、もうとくに時効を過ぎた古いものを、葬り去らずに置くことはかえって失礼と気付いて、全部処分してしまった。

そんな中から一つだけ、追分寮の庭に今も埋まったままの思い出を（過日卒業30年の同窓会で本

人と語り合ったときの感触から、もう公にしても許されると思ったので) 個人名は差控えるが、書いておきたい。

修養会の最初の晩だったように思う。彼女は思いつめたように何かを大事に握り締めてやってきた。相談室に度々「お父さんに愛されていない」悲しみを訴えていた生徒だった。小さなガラス瓶につめた、お父さんの写真と、自分のお祈りを書いた紙を、修養会の場所に埋めて帰りたいという。お祈りの内容は想像がついた。能弁ではない少女の切なく訴える眼を見て、私は黙って協力することにした。夜暗くなって、友人たちが皆宿舎に収まってから、番頭さんはスコップをもって彼女にしたがった。

寮の南庭の隅の大きな松の根方を掘ると、彼女は大事そうに持ってきた瓶を埋めたので、私は元通りに土をならして、また黙って引き上げた。その晩彼女は、念願を果たして安らかに眠ったらしく、翌朝は本当に晴れ晴れとしていた。

それから1年後か2年後か定かでないが、次に彼女が追分寮に行った時には、確かもう高校生になっていた。ところが驚いたことに、取付け道路の移設のためか、庭の造作変えのためだったのか、心を込めてお父さんの写真を埋めた松の木が、根

こそぎ掘りとられて無くなっている。多感な少女がどれほどショックを受けるか、私はいささか心配だった。だが、彼女が黙々と庭を見たあと、「あの瓶どこへ行ったか分からないね」こっそり声をかけると、微笑して「先生。もういいの。あの頃のあたしって、可愛かったなと自分で思います」と言った。そう言えるだけに彼女は成長していたのである。

そのほか、寮でのプログラムや生活はもとより、軽井沢測候所から噴火情報を得ては、安全を確認して毎夏のように出かけた石尊登山などについても、追分には限りなく多くの懐かしい思い出が埋まっていて、個人的なものも含めて一つ一つ掘り起こしていったら、一冊の本を書いても盛り切れないだろう。

学校教育の欠陥や限界がさまざまに取り沙汰される今日、信仰的な体験とともに、先生と生徒の、また友達同志の、愛情と信頼に満ちた人格的な関係を育むこのような共同生活の場を与えられてきた東洋英和の生徒たちは、本当に幸せだと思う。そして教師も又、生徒との交わりを通して、多くの恵を与えられてきたことを思って、心から感謝せざるを得ないのである。

神と出会い 友とかたる

礼拝堂のイスにすわり、子ども達と佐野牧師の語られる聖書の話しに耳を傾けていると、何十年か前、英和の生徒だった時の事が思い出されます。修養会に参加して、先生方が話される言葉一つ一つを、素直に心に残し友と語りあかしたこと。台風の為帰ることができなくなった私達を心配して、

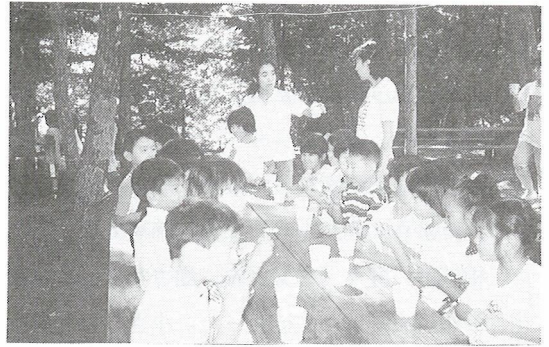
安藤記念教会 水野淑子
東京からとんできておにぎりをにぎってくださった、今は天国にいらっしゃる長野先生のこと。自然に恵まれた素晴らしい環境の中であって、古き物が大切に生かされた施設でした。はこ舟の食堂にはキャフテリアで使っていた、イスとテーブルが置かれ、礼拝堂の長イス等、その中で生活する

ことで、神と出会った友が、在学中にクラスで18名も受洗されていた事を古きアルバムをめくって気がつきました。母校で信仰生活へ導かれた多くの友が、それぞれの場で、良き働き人であると思っています。

私も教会学校の子ども達と、改築前最後の団体として、気持ち良い生活をさせていただきました。小学部で教頭先生をされていた伊藤先生には、大変お世話になりました。私達は、毎年70名前後でおしかけていましたが、いつも笑顔で迎えて下さいました。あまりご注意は受けませんでした。一つだけ心に残っているのは、「傷をつけた白樺の枝は、ぜったいもとにもどらない」ということです。先生が追分寮を愛されていたことがわかります。食後のお皿洗いでは、英和での生活の話に花が咲きました。先生の教え子が幼稚園の教師となり、リーダーとして参加しているのもうれいことでした。今回6年続けて参加したTさんも、後輩です。「6年間続けていて、本当に良かったと思います。追分寮が新しくなった時には、リーダーとしてぜひ来たいです」と、感想を寄せてくれました。

夏期学校に参加する子ども達のほとんどが、幼稚園の卒園生です。それぞれ違う小学校に通っていて、追分寮で再会できることを楽しみにしています。ある子は、虫とりに夢中になり、ある子は、浅間山の火山岩を見つけて喜び、スポーツをしたり、木立ちの中でのんびり絵をかいたり、おしゃべりをします。

「緑に囲まれた落ち着いた礼拝堂、宿舎、はこ舟を型どった食堂、心のなごむ場所でした。何年も使わせていただいて、子ども達の心にすばらしい思い出を残すことができ、とても感謝しています」
(校長 角谷多美子)



「普段自然に接する機会の少ない子ども達と、2泊3日の短い時ではありますが、寝食を共にすることは、オフィス街で過ごす私にとっては大きなお恵みです。この3日間は、大自然に囲まれている追分寮の機能をフルに生かして、ネイチャーゲームやスポーツを楽しみます。この行事の奉仕での最も大きな喜びは、一年ごとに成長していく子ども達の姿を伺えることと、美味しい食事を、みんなで一緒に食べること。これからも機会が、あれば是非、ながくこの行事に関わらせて頂きたいと思っている次第です。今後も追分寮の更なる発展を祈念いたします。」(落合正光)

キャンプファイヤーの火を分けて、それぞれの部屋に入って祈りを合わせ、リーダーの証しに、耳をかたむける子ども達ひとりひとりの顔は、とっても可愛くて、イエス様に集められた子ども達と共に生活ができる幸せを感謝する時です。

「すべてに時があり、すべてが主のご計画です」の御言葉を思う時、神さまに選ばれた一人としていつまでも、子どもの笑顔を見ていたいと思う、この頃です。

<あとがき> 旧追分寮について特集いたしました。今年、2代目が完成し、目には見えなくなりましたが、あのなつかしい寮は、今も私達の心の中に生きています。新しい追分寮にも、恵が満ちあふれていくことを祈りつつ。

(幼稚園 野田/小学部 伊木、東)